
僕の友達

小仁沢 為絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の友達

【Nコード】

N5985Q

【作者名】

小仁沢 為絵

【あらすじ】

僕の友達が変わっている。

何だか急に昔住んでた街に行きたくなつて、思わず電車を降りてしまった。

昔住んでたと言っても、高校入る前まではこっちにいたし、今住んでるところは隣街だから電車一本、二十分で行き来が出来る。でもここは今いるところと違ってへんぴな田舎街だからそうそう来ることなんてない。

ふと目に留まった古本屋に入ってみると、中学の時、わりと仲のよかったクラスメートがいた。

確か名前は七原と言った気がする。

「よう」と声をかけると七原は一瞬きょとんと、俺の顔を見て、すぐに「ああ、北島」と懐かしむように言った。

「久しぶり、おまえこんなとこで何してんだ？」

「何って、手伝い。ここ僕の家なんだよ」

「は？ そうなの？」

そういえば家は古本屋をしてるとか、そんな話を聞いた覚えがある。

「なあ、久しぶりにあったんだし、飲みにでもいかね？」

「別に構わないけど、今日は閉店までいなきゃいけないから、たぶん八時過ぎるよ？」

「おう、かまわねえよ。駅前居酒屋な」

「わかった」

店を出て時計を見た。まだ五時ちょっと過ぎたところだ。しばらくどっかで時間つぶすか。

突然、目の前を何かが横切った。驚いて足を止めると、黄色い目をした黒猫が口に魚をくわえてじっと俺を見ていた。どっかから盗

んできたんだろうかな。

猫が苦手な俺は、あまり猫と関わりたくなかったから、猫を無視して駅までの道を戻っていった。

八時すぎに居酒屋に行くと、すでに七原は来ていた。俺に気付くと手を振って合図をした。

「わりい、遅れた」

「いや、大丈夫だよ」

七原の隣にはもう一人男が座っていた。

目に掛かりそうな黒くて艶やかな髪と大きくて丸い目が印象的なその男を俺は知っていた。

「おお、ハジメじゃん！おまえも来てたんだ」

ハジメは七原の従兄で、三年の二学期の席替えで前後になったのをきっかけに話すようになった。

ハジメは妙な語り口と独特の雰囲気が好評でクラスの人気者ではあったが、話をしたのはその時が初めてだった。

最初は誰にでもいい顔するところがあって、いけすかない野郎だなとは思っていなかったけれど、実際話してみるとハジメはおもしろくて、いい奴だった。

卒業してから、七原もそうだけど、ハジメにもずっと会ってなかった。

「北島久しぶり。卒業してからだから五年ちよっと会ってなかったんだな。元気？」

ハジメがうれしそうに言った。

「あたりまえ。おまえは？今何やってるんだっけ？」

「んー、フリーターみたいなもんかな。睦月のところでバイトさせてもらってる」

七原の名前は睦月って言うんだっけ。今更ながら思い出した。

それからしばらく、それぞれの飲み物を好きかって飲みながら、いろんな話をした。中学の思い出、嫌いだった奴、実はちよっと狙ってた女子とか、うざかった教師の話。卒業してから五年間、どんな時間を過ごしていたか。そして今現在の話など。

しばらくすると熱心に話を聞いていたハジメも、つまみの魚を食べることに夢中になり、ほとんど俺と七原の間だけで会話をするようになっていた。

「俺んちさあ、妹いるんだけど、最近猫飼いたいってうるせーんだよな。俺、猫嫌いなのによ」

「何で？可愛いよ、猫は」

「嫌なんだよ。なんか恐くてさ。十歳の時に猫に思いつき顔引っ掛けられたんだよ」

「何で猫に引っ掛けられたわけ？」

黙々と魚を口に運んでいたハジメが口を挟んだ。

「何で？何でだろ・・・よく覚えてねーんだよな」

「そっか」

興味を失ったのかハジメはまた魚を食べはじめた。

「その猫、もしかしたら家のルドルフかもしれないな」と七原が言った。

「おまえのうち猫飼ってたのか？」

「うん、黒猫。北島覚えてないかもしれないけど、僕と北島同じ小学校通ってたんだよ」

「そうだった？」

「北島あの頃は学校一狂暴なやつでさ、いじめられたこともたくさんいたみたいで」

俺がガキ大将をやったのは覚えてる。下級生いじめたり、上級生と喧嘩してたよな。

「もしかして俺、七原のこともいじめたりしてた？」

七原はあいまいに笑った。否定はしない。

「うわあ、ごめんな、七原！今更謝られてもおせえよって話だろう

けどさ」

「別にかまわないよ。小学生の頃じゃたいしたことされてないし。北島、猫の魔法の話知ってる？」

七原が突然そんなことを言った。

「猫の魔法？なんだそりゃ」

「猫はねえ、一生に一度魔法が使えるんだよ。いつ使うかは本人達の自由らしいんだけどね。家のルドルフは魔法を使って人間になったんだ」

「子供向けのお伽話かよ？くだらねえ」

「いや、本当にいるんだよ。魔法を使った猫が」

「まあ暇つぶしにはなるかもな。聞かせてくれよ。どんな話なんだ」
七原は「ふっふっふっ」と不気味に笑ったあと、少し遠くを見るようにしてぽつりぽつりと話しはじめた。

僕が生まれた日に、お父さんが道端で死にかけの小さな黒猫を拾ったんだ。ほとんど呼吸もしてない、みすばらしくて汚い猫だったって。

ちょうど病院から電話が掛かってきたところで、すぐにでもいかなきゃ我が子の誕生に立ち合えなかったんだ。

でも猫を放っておくわけにもいなくて、さんざん迷って結局お父さんは子猫を助けることにしたんだ。

近所の獣医さんに診てもらって、かなり衰弱してるのがわかったらしい。呼吸がとまって、心音も聞こえなくなって、危険な状態だったけど、なんとか一命をとりとめた。その子猫の治療が終わったのと同じくらいに僕が生まれたんだって。七原家に子供がいっぱいに二人もできたみたいだって言われて、僕も、ルドルフも、みんなにすごく可愛がられたよ。

生まれたときから僕達はずっと一緒。朝、一緒に起きて、一緒にご飯食べて、一緒に遊ぶ。夜になればお風呂に入って一緒に寝る。毎日その繰り返し。僕達はとても仲のいい友達だったよ。もちろ

ん今もだけど。

ある夜、僕は寝る前にルドルフに絵本を読み聞かせていた。ルドルフは猫だから、返事をしたりはしなかったけど、黄色い真ん丸の目で僕の顔をじっと見てたから、たぶん聞いてはいたんじゃないかな。

その日は人間になった猫の話を読んだんだよね。

読みおわってから、「おまえも人間になれたらいいのに。人間は楽しぞ」って言ったんだ。

僕は冗談のつもりだったよ。猫が人間になんて慣れるわけないってことは知ってたから。だから朝起きたら、びっくりしたよ。

隣で寝ていたはずのルドルフがいなくて、代わりに、部屋の隅に僕の服を着て、僕の漫画を読んで笑ってる知らない男の子がいるんだから。

そしてその少年は自分は黒猫のルドルフだって言った。一生に一回しか使えない魔法を使って僕のために人間になったんだって。

最初は嘘だと思った。猫が魔法なんて使えるわけない、そもそもこの世に魔法なんて存在しないって。

その少年は証拠を見せるって言って、僕の前で猫に、ルドルフになって見せたんだ。気付いたら少年が消えてて、脱け殻状態の服の中からルドルフがでてきたって感じかな。

なんか裏切られた気分だった。自分で言っておいて、本当勝手なんだけど、やっぱり僕は猫のルドルフが好きだったんだよね。

あまりのショックに僕は無言で家を出た。ご飯も食べないで、着替えもしないでいたもんだから帰ってからお母さんに怒られることになったんだけどね。その時はそんなこと気にしていられなかった。内心どうしたらいいのかわからなくなってたんだ。だからひたすらまだ目覚めて間もない朝の町を一人で歩いて心を落ち着かせようとした。

ところが僕の思惑とは裏腹にルドルフが後からついてくるんだよ

ね。森のくまさん状態だよ。

僕は一人になりたいからひたすら歩いて、最後の方には走ってたけど、なんとかルドルフをまいたんだ。その時のルドルフは人間の姿をしていた。きつと二足歩行に慣れてなかったんだろうね。だからまけたんだと思う。

ようやく一人になれたと思ったのも束の間、今度は近所のガキ大将に会っちゃったんだよ。そう、それが北島。あの頃は本当嫌いだった・・・あ、今は大丈夫だよ。

まあガキ大将に・・・北島に会っちゃったわけだから、そのまま何も言わないで素通りするわけには行かない。

一応、「おはよう」とは声をかけたんだ。北島は犬の散歩中だった。ボーダーコリーかな？牛みたいな柄してたよ。

僕に気付くと近づいてきて、「よう」って挨拶を返した。その時点ではまだ何もされてなかったんだよ。なのに、突然目の前に黒い影があらわれて、それは北島の顔目がけて大きく飛び跳ねたんだ。そしてそのまま着地した。

一瞬の出来事だった。見ると北島の額には爪で引っ搔いたような大きな傷ができていた。

北島は手に持っていたと思われるろうせきを、地面に近いところに投げ付けて、よくわからない悲鳴を上げて、逃げていった・・・あ、思い出した？

僕はただ茫然と立ち尽くし、いったい今、何が起こったのか考えていた。地面に視線を落とすと、そこには頭から血を流してぐったりしている猫の姿のルドルフがいて、僕はあわててルドルフを助け起こした。

北島の額の傷はルドルフがつけたものだったんだ。あの時は悪かったね、なんか。北島にいじめられるたびに僕はルドルフにそのことを話していたから、きつと北島と一緒にいる僕を見ていじめられているとでも勘違いしたんだろう。

ルドルフは頭に怪我を負ってまで僕を助けようとしてくれたんだ。そう思ったら、今までの裏切られたような気持ちは一気に引いていた。

猫であろうと人間であろうと僕の親友のルドルフであることに変わりはないってことが、その時解った。

だから今でもルドルフは人間だったり、猫だったりするけど、僕の一番の友達だよ。

七原の話はそこで終わった。

猫と人間の友情、作り話かと思ったけど、俺がろうせきをぶつけたエピソードは本当だ。ただし、あの頃の俺はその「何か」を猫だとは思っていなかった。

「七原に会ったら突然強い風が吹いて、額に傷が出来ていた。俺は今の今まであれはかまいたちに会ったんだと思ってた。怖かったからなんだかわからないけど、とにかく逃げなくちゃと思って手に持ってたろうせきを投げつけて逃げたんだ」

「北島自身は猫だとわからなくても、潜在意識の中で、あれは猫だと判断してたんだろうね。だから北島は理由はわからないけど猫が嫌いだったんだよ」

「なるほどな。で、そのルドルフって猫はどうしてるんだ？」

「どうしてるって、今、ここにいないじゃない」

そう言って七原は視線を横にずらした。俺も一緒に七原の視線の先を見た。

そこには鮪の刺身を黙々と食べるハジメがいた。

「ハジメがルドルフかあ？」

確かに猫っぽいけど、でもやっぱ嘘くさい。

「どうだろね」

七原は意味深な言い方をした。

十二時を過ぎた頃、

「そろそろ帰ろうかね」

とハジメが言った。

便所に行くという七原を残して、俺とハジメは外に出た。

夏だつてのに、今夜はやけに空気が涼しい。

「なあ北島」

「なんだよ」

「額の傷痛かったか？」

「は？」

いきなりなんだこいつ。

ハジメが俺に向き直る。大きくて丸い目が、黄色く光っているように見えた。昼間俺が見た魚をくわえた黒猫と同じ色の目だ。

「ごめんな、あの時、睦月のことで頭一杯だったから。実は何にもしてなかったんだってな」

「・・・何の話だよ」

「でも俺も痛かったんだよ。ろうせきって以外と固いのな」

そう言つてハジメは猫のように目を細めて笑った。店の明かりのせいかその瞳が金色に輝いて見えた。

その時七原が店から出てきた。

「ごめん。帰ろうか」

「おう。じゃあな北島。また遊ぼうな」

ハジメと七原が手を振り、歩いていった。

俺は何て言ったらいいのか解らず、ただ茫然と去りゆく二人の後ろ姿を見つめていた。

《FIN》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5985q/>

僕の友達

2011年2月2日21時10分発行